
おくりもの

オムラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おくりもの

【Nコード】

N5188U

【作者名】

オムラ

【あらすじ】

過酷な人生を歩んだ少女がその命を終えるとき、目の前に何か軽い天使っぽい人が現れる。わけがわからないまま、眩い光に包まれて意識が途絶えた。次に少女が目を覚めたとき、少女が居た場所には……
現代日本（東北の田舎）だった

不定期更新です

プロローグ（前書き）

少々重いはじまりです。

はじまり以外は、ほのぼのだと思います。

ブローグ

粉のような雪の粒が降りしきる中、私は捨てられた。

私にはお父さんとお母さん、そして妹が二人と弟が一人いる。

一番お姉さんの私は、妹と弟のために働かなくてはならないとお母さんに言われ、5歳の時から工場で働いていた。

何の工場かはわからない。私は偉い人に言われたことをするだけだった。

朝から夜まで働いて、貰ったお金は全部お母さんに渡す。

家に帰るともうくたくたで、すぐに寝たいけど妹と弟が遊びたがるから、一緒に遊ぶ。

お父さんはお酒を飲んでから帰ってくるので、遅い。

お母さんは知らない男の人と、どこかに行ってしまう。

お母さんが残っていた一つのパンが私たちの唯一のごはんだ。

でも妹と弟がいっぱい食べたがるから、私は一口だけ食べる。

遊び疲れた妹と弟が眠り、私も一緒に眠る。

少し経って、お父さんが帰ってくる。そのまた少し後お母さんが帰ってくる。

二人はいつも大きい声でケンカをしている。

妹二人は起きないけれど、弟と私はそれで起きてしまう。

泣いてしまう弟をあやかしながら、二人のケンカが終わるのを待つ。外が少し明るくなってくると、ケンカは終わることが多い。

その時にはもう弟は眠っているが、私はあまり眠れなくて、静かになつてから少しだけ寝る。

外がうるさくなつて来てから、私は目を覚まして、パンを一かけら食べて、工場に行く。

そんな毎日をずっと続けてきた。

これからも、変わらないのだと思っていた。けれど、それは変わった。

工場で、私は右足を怪我した。

いつも通りに働いていたけれど、途中で何かに背中を押されて、機械に巻き込まれてしまった。

巻き込まれたのは右足だけだった。

ものすごく痛くて、熱くて、すごく血が出ているのがわかって、耐えることしかできなかった。

そんな私を、一緒に働いている人たちが運び出した。

機会のない所に横たえられて、怪我をした右足に何かを押し当てられたが、痛みは消えない。

どのくらいの時間が経ったのかわからない。

気がついたら私の頭の上で、工場が一番偉い人とお母さんがいた。

「お母さん」と言おうとしたけど、声に出したかったけれど、出なかった。

お母さんと偉い人は、私を見ないで話をする。

「あんとんとこの娘だろう。こっちも迷惑してんだが、今回は目を瞑るから早く引き取ってくれよ」

「……知らないよ、こんな使えない子供なんか」

お母さんは、消えた。

残っているのは嫌そうな顔をした偉い人だけ。

そして偉い人はやっぱり私を見ないで、遠くに居る人に声をかけた。

「おい、お前！そう、お前だ。ゴミ捨てに行くんだろう？ついでだからこいつも持ってつてくれ」

そして私は今、大量のゴミの中に埋もれている。

痛みはもう、なくなった。

さっきまで寒さも感じていたのに、それすらも薄れていた。

私は死ぬんだ。

やっと死ぬんだ。

それにしても私は一体何だったのかな。

人間？けれど今、私はゴミと一緒にだ。

本当にお父さんとお母さんの子供だったのかな。

もしかしたらどっかで拾ってきたのかもしれない。

捨てられる子供なんて、たくさんいる。

その中でも生きていられるなんて、ほんの少しだけ。

だったら、私は生きていられただけ幸せだったのかもしれない。

あ、なんか視界がぼやけてきた。

どんよりとした灰色の雲から落ちてくる白い雪も、はつきりとは見えない。

そういえば、妹と弟はちゃんとごはん食べたかな。

お父さんとお母さんは今日はケンカしていないかな。

道に落ちていて拾ったチャップブック、結局少しか読めなかったな。

聖書はもう読み飽きたから楽しみにしていたのに。

ああ、あったかいスープ、食べてみたかった、な。

白が消え、全てが黒になる。

*

ん？

あれ、何かすごく眩しい？

おかしいな、さっきまで真っ暗だったのに。

あれ、私死んだんじゃないっけ？

死んだのなら、眩しいとか思わないよね。

あ、死後の世界ってやつかな？

もしかして、目を開けたら天国？

ちよっと、怖いな。でも気になるし、開けなければ何もわからないし。

私はゆっくりと、下ろしていた瞼を上げた。

しかし、すぐに閉じた。

「……まぶしい」

あまりの眩しさに目を開けることは出来なかった。

少しだけ見えたのは、人影。

もしかして、神様？

「あ、ごめんね。眩しいよね。神々しく見せるための演出なんだ、コレ。正直私はいらないと思うんだけど、上の人たちは伝統だとか言っただけで変えようとしなんだよ。今オフにするから。……よし、もう目を開けて大丈夫だよ」

……。

あまり開けたくない気もしたけど、私は目を開いた。

「やあ」

そこには、笑みを浮かべる天使っぽい男の人がいた。

髪は綺麗な金髪で 私の髪の色は赤茶で、金髪に憧れていたから羨ましい、瞳の色は髪の色と同じで金色だ。

顔立ちは見たことがないくらい整っている。

目はたれ目で、その笑みはどこか温かさを感じさせていた。

服装は半袖で半ズボン。腰の辺りには何かが巻かれている。全てが真っ白。今まで見たことがないくらい、綺麗な白。

そして、頭の上には輪がある。

教会の絵に描いてある天使と同じ輪だ。

さらにとても立派な羽が天使っぽい人の背後に見える。

「……天使？」

私がそう言つと、目の前の人は頷いた。

「色々説明したいんだけど、時間がないんだ。悪いけど早速本題に入らせてもらうね」

そう言つた天使っぽい人は、私の目の前に立つて両手を胸の前に合わせて、目を瞑つた。

「……我、神の命により、汝を神の年2000にして国は日本国へと転移する」

目の前の天使っぽい人がそう言つと、また眩しくなつた。

目を細めながら見ると、眩しいのは天使っぽい人ではなくて、私だつた。

「え、え？」

「メアリー」

名前を呼ばれ、戸惑いながら目の前の人を見ると、やっぱり笑っている。

「幸せになりなさい」

光が、私を包み込んだ。

全てが、白になつた。

プロローグ（後書き）

メアリーの生きた世界は特定はしません。が、参考にしたのは19世紀から20世紀のイギリス（特にロンドン）における労働者の環境です。

チャップブックとは薄い挿絵付きの小冊子のことで、民間伝承や民謡など載っていたようです。聖書と併せて文字の勉強として使われていたらしく、貧しい家庭でも数冊あることも少なくなかったそうです。

メアリーという名前は当時の人気があった女の子の名前らしいです。悪く言ふとありふれた名前で、メアリーの名前に特別な意味は込めていません。

前半は特に重い内容でしたが、以降はほのぼのと進んでいきたいと思います。

出会う 01

西暦2000年、日本国。

東北地方のある地域のある町。

町の名は犬田木町。
けんたきちよう

犬田木町は小さく、町で一番高い建築物は小学校の校舎で3階建。小さいからと言って、町が廃れているわけではない。

その理由が、町の中心にある、小高い山の上にある長い歴史を誇るお寺で、その名を山福寺という。

長い歴史を持ち立派な造りであるその寺院はちよつとした観光地としてちよつとばかり有名であり、犬田木町は時折訪れる観光客のお零れを貰っているのだ。

その犬田木町で、寺主催の祭りがおこなわれていた。

一年に一度、仏への祈りと感謝を込めて行われるこの祭りは、山福祭りという。

山福寺のある山の麓から山道にかけて、そして寺院自体も華やかに飾りつけをしていて、普段の厳かな雰囲気はあまり感じられない。

寺院の前の開けた場所に、町の人びとが集まっていた。

「お寺さんの息子、何歳になったんだあ？」

「確か8歳でねっけ？小学2年生」

「もうそんな大きくなったんだがい」

集まった老人たちは、山福寺の住職の息子の話をしていた。

山福寺には一人の住職とその家族がいる。

住職の名前は山福寺 さんふくじ 直人。
なおと

年は38歳。身長は180センチと高身長で、恰幅も良いため、初めて会う人には威圧感を与える。しかし、性格は穏やかでおおらかであり、常に笑顔で丁寧な言葉遣いをする。

加えてやや細い目の横に出来た笑い皺が、威圧感を払拭させる。

彼には妻と一人息子がいた。

妻の名は山福寺^{さんふくじ} 幸子^{ゆきこ}。

年齢は37歳。身長は女性の平均そのものであるのだが、高身長の夫と並ぶと、どうしても小さく見られがちであった。

夫同様彼女もいつもにこやかである。

しかし、怒らせると怖い人物でもある。

そして、一人息子の名は山福寺^{さんふくじ} 素^{すけ}（はじめ）。

老人たちの話していた通り、今年8歳で小学2年生だ。

年の割に大きな背丈は、おそらく父親譲りだろう。

体格は父親に似たが、性格はあまり似なかった。いつもにこやかな両親とは対照的に、その表情は常に堅かった。

性格は真面目で落ち着いており、その体格の良さもあってか、学校では一目置かれている。

父親の後を継ぐために日々父親に付いて学んでいて、今回のお祭りでも父親の横に常に付いている。

「早く食べたいよーまだなのー？」

「仏様にありがとって言うてからよ」

「みんなで食べるごはん楽しみだな！」

父親と母親、小さい娘の3人家族は、儀式の後で行われる町民全員

での食事会の話をしていた。

儀式と言っても仰々しいものではない。

町民が各々米や野菜などの食材を持ち寄り、それを寺の前の開けた場所に、一か所にまとめて置く。

それを町民らが一步下がって取り囲み、住職である直人が一步前に出て、山福寺で祀る仏への言葉を唱える。

町民らが仏への祈りと感謝を込めて黙とうを捧げ、儀式は終了となる。

その後持ち寄った食材を用いて、町民全員の分の料理を作り、それを大人はお酒も追加して食べるのだ。

儀式とは言いつつも、時代を経てその形式は簡略化して、内容は町民の交流会となっている。

そして今年も例年通りの儀式が行われ、終わりを告げようとしていた。

「皆さん、お疲れさまでした。お料理のお手伝いをしていただけの方は台所のほうへお願いします。他の方々は会場の準備をお願いします」

直人の一声で、静けさは無くなり、話し出す者もいれば住職が話し終わる前に颯爽と移動する者もいた。

「素、父さんと一緒に米俵を運びましょう」

「わかりました」

直人に言われた素は、足早に中央にある米俵の元へ駆けた。

素が米俵に手をつけようとしたときだった。
素の周りを、眩い光が囲んだ。

「素!？」

「何だ？」

「何が起こった？」

素の周りを囲んでいた光は、次第に大きくなり、町民をも囲む。
眩しさで町民全員が目を瞑ったときだった。

「うわっ」

素の普段からは想像できない、慌てるような声が聞こえた。加えて
それなりに重さのあるものが落ちてくるような音も。
音が聞こえると同時に、光は消えた。

それに気づいた町民らが目を開けると、そこには不思議な光景が広がっていた。

町民全員が疑問に思ったことを、代表して直人がきいた。

「素、お前の上に乗っているお嬢さんはいついらっしやっただ？」
「……今、落ちてきました」

米俵の横で倒れる素の上には、少女　　ここらでは見ない赤みの強い茶色の肩まで伸びた髪の毛が印象的で、肌の色はどうみても黄色人種ではなく、白色人種。本来ならば綺麗な白なのだろうが、服も含めて全体的に煤にまみれた様に黒い。身に着けている服は半袖のシャツに半ズボンで、色も綺麗とは言いが、所々破けていたりして全体的に清潔感が全く感じられない服だ。体つきは華奢でほとんど肉がついてなく、まさに骨に皮がくっついた様である。そしてその右足には包帯のような布が巻かれていて、血が滲んでいる

が意識を失った状態でした。

出会う 01（後書き）

えせなまりです。

リアルを追い求めると和訳が必要となるので。

追記：訂正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5188u/>

おくりもの

2011年7月14日14時02分発行